

## 神奈川

3,000点に及ぶ浮世絵を所蔵する公益社団法人川崎・砂子の里資料館(休館中)のコレクションが、川崎市が2019年中にJR川崎駅前に新設する専用ギャラリーで常設展示されることになった。市が同館から浮世絵を無償で借り、管理・運営を受託する公益財団法人川崎市文化財団がテーマを定めて概ね4週間ごとに55~60点を展示替える予定だ。

同館は、参院議員や神奈川県会議長を務めた斎藤文夫氏(90)が自宅(川崎区砂子)をなまこ壁の江戸町屋風の外観に改装し、私設浮世絵美術館として2001年に開館。その後、公益社団法人を設立して運営を移管した。年間約7,000人が訪れる人気施設だったが、入場料は一貫して無料。年間1,000万円を越す運営費は、斎藤氏が寄付してきた。

しかし、斎藤氏が高齢になったことから「体力的にも厳しい」として、16年9月に家屋の建て替え計画に合わせて休館を決定した。その後もコレクションの貸し出しは続けており、昨年4~6月に神奈川県内の平塚市美術館で開催した「浮世絵・神奈川名所めぐり」は50日間で約2万4,500人の入場者を記録し、関係者を驚かせた。

同館のコレクションはわが国を代表する浮世絵一括収集の一つとされ、「東海道五十三次」や「富嶽三十六景」といった続き物を全作品そろえるなど希少性が高い。浮世絵肉筆画(原画)も約100点と充実している。また、地元・川崎や横浜など神奈川県内にゆかりのある浮世絵も多数含まれ、郷土色を持つのも特色だ。

斎藤氏はコレクションの散逸を防ぐため、自身が代表理事を務める公益社団法人と市との間で「所蔵美術品の活用に向けた基本合意」を今年4月に締結。これに基づき、市が19年中に浮世絵専用ギャラリーを設けることや、公益社団法人が展示に必要なコレクションを概ね20年間にわたって市へ無償貸与することなどが決まった。

市はギャラリーの候補地として、JR川崎駅北口に直結する川崎駅前タワー・リパークビル3階の市文化財団の事務室跡(約150平方メートル)と、市が13年10月に旧東海道沿いに開設した東海道かわさき宿交流



2016年9月に休館した川崎・砂子の里資料館。なまこ壁の江戸町屋風の外観が特色だ

## 浮世絵で川崎のイメージアップへ

館の3階展示室(約50平方メートル)を検討。展示規模や立地が優れているとして、市文化財団の事務室跡に決めた。

ギャラリーの整備事業費としては、空調設備の改修や展示用照明の新設などに約1億円かかるが、市が全額負担する。人件費、光熱費、広報、グッズ・図録作成などの運営事業費(年間2,300万円余)は、入場料や物販収入で賄う予定。このほか、フロア賃貸料相当額は、管理・運営を受託する市文化財団へ市が補助金として交付するという。

他都市の浮世絵専門美術館としては、すみだ北斎美術館(墨田区が設置、墨田区文化振興財団・丹青社共同企業体が運営)と藤澤浮世絵館(神奈川県藤沢市が設置・運営)が16年に開館し、それぞれ年間30万人、4万人を集客して好調なスタートを切った。これらの先行事例から、川崎市は年間6万人の入館者目標を掲げている。

同市は浮世絵専用ギャラリーの開設により、川崎のイメージアップを狙う。川崎駅は羽田空港や東京駅、品川駅にも近いことから、国内外からの集客が見込めそうだ。20年の東京五輪・パラリンピックを機に、訪日外国人に対して「和」の文化を発信し、川崎駅周辺を国際的な観光拠点とすることも見据えている。